

「ターナー文庫目録」等の刊行について

(「法制史関係資料展」展示図書)

本法学部には、外国の学者の蒐集にかかる多数の文庫が所蔵されている。なかでも、ターナー、ハチェック、トゥール各氏の文庫は、第一次世界大戦の賠償品としてドイツから送られてきたもので、昭和6年に大蔵省から京都大学に移管され、昭和7年3月31日に法学部に納められたものである。去る10月25日から27日にかけて附属図書館主催の「法制史関係資料展」にその一部が展示された。

以下、各文庫を簡単にご紹介する。

1. ターナー文庫 2643冊

本文庫は教会法に造詣の深かった、フリードリッヒ・ターナー (Friedrich Thamer) の蔵書であるため、教会法関係の図書が多く、その性格上1500年代の出版物が大部分を占めている。そもそも教会法はドイツ民法典成立以前においては、ドイツの家族法の役割を果たしてきたものであり、従ってドイツ法史研究上、同文庫の学術的価値は極めて高い。

2. ハチェック文庫 2113冊

ユーリウス・ハチェック (Julius Hatschek 1872~1926) は、ワイマル憲法下において国法学および行政法学の分野で活躍し、英独比較法学者

としてイギリス公法の研究においても多大な業績を残した人である。同文庫の大部分は公法学上の図書であるが、哲学、歴史学関係の図書も多く含まれている。わが国の研究者にとって利用価値の高い存在となっている。

3. トゥール文庫 1933冊

アンドレアス・フォン・トゥール (Andreas von Tuhr 1864~1925) は、ドイツロマニステンに属し、その精密周到な体系によってドイツ普通法学の伝統に最後の光輝をそえた民法学者である。同文庫は19世紀から20世紀にかけて出版された私法関係図書の一大コレクションである。

今回刊行された目録は、オフセット印刷、A4版、冊子形態、本文二段組、各187、135、120頁で、配列は、京都大学法学部、経済学部欧文図書分類表に従っている。各項目は、著者名、書名(副書名)、(版次)、(学位記)、発行地、発行者、発行年、(巻数)、頁数(地図、図版についてはサイズ)、(叢書名、抜刷りなど)の順で記載され、巻末には著者名(場合によっては書名)の索引が付けられている。

文庫目録の刊行を機に、これらの文庫が一層利用されんことを期待する。(法学部図書室)

重文 紙本墨書 兵範記 49巻

「兵範記」は京都西洞院兵部卿平信範(1112~1187年)の日記で、信範21歳より60歳にわたるものであるが、その間欠くところも少なくない。信範自筆の「兵範記」25巻が本文庫に収蔵されているが、自筆本は当時の宣旨類、その他の文書の裏面に記されており、しかも当時のものとしては完全に保存されているから、表裏合せて保元平治時代の平氏側を代表する唯一の根本資料として最も珍重すべきものである。なお原本の欠を補う新写本24巻が別に添付されている。

兵範記は人車記その他の異称がある。兵範記の称は官名と実名の各々1字を組合せたものであり、また人車記の称は信範の2字の各々の偏を連記し

たものである。日記は崇徳天皇の長承元年(1133)より高倉天皇の承安元年(1171)にいたる約40年間にわたる長期のものである。その間欠くところも少なくないが、平安末期の変転する情勢が遺憾なく活写されている。日記は朝政、朝儀に詳しく仏事供養等の宗教的行事に関する記事も豊富である。特に保元の乱に関しては、もっとも信拠すべき資料を提供する唯一の根本資料である。日記は故紙に記されたものが多く、その裏文書には当時の名家の書状が多量に存在している。この時代の書状がこの様にまとまって伝存することは極めて珍らしく、この紙背文書も、また平安末期の世相をうかがうことのできる貴重な資料である。